

し、秋まで水路の常連となるが、多い日でも10匹を超えることは少ない。秋にはアカネの仲間が加わるが、ウスバキトンボに比べるとはるかに少なく、そのうえ年によって飛来数の変化が大きい。ショウジョウトンボは7,8月には毎年飛来するがいつも雄1匹だけで日に2匹以上見ることはなかった。大型のトンボは種類が多いが個体数は非常に少ない。ヤマサナエ・オオルリボシヤンマ・マルタンヤンマ・ミルンヤンマは14年間に各々1匹ずつで、カトリヤンマも2匹に過ぎない。オニヤンマ・ヤブヤンマ・ギンヤンマ・クロスジギンヤンマはほぼ毎年飛来するが、観察できるのは各種ともに年間を通して10匹を超えることはなかった。室内に迷い込むことの多いのはヤブヤンマで、クロスジギンヤンマ・オニヤンマがこれに次ぐがギンヤンマはこれまでに2匹だけであった。

均翅亜目のトンボは少なくイトトンボの仲間は全く姿を見せなかった。ハグロトンボは2回飛来を観察できただけであり、ホソミオツネトンボは1985年の春に数匹が住みついていたが、その後全く見ていない。オオアイトトンボは1998年に雌雄がつながって飛来した。タカネトンボとハネビロエゾトンボは2,3年に1匹か2匹が室内に迷い込むが屋外で見たことはない。コヤマトンボはこれまでに2匹しかとれていない。ネキトンボも1998年秋が初記録であった。

(YAMAGUCHI FUKUO)

神戸市須磨区神の谷3丁目6-4)

ヤマトエンマコガネを探して下さい
高橋 寿郎

ヤマトエンマコガネ *Onthophagus (Strandius) japonica* Harold, 1874 は、1875年に神戸在住の商人 Lenz, Tusion が採集した標本に基づいて Harold, E.V. が新種記載した種である (Abhandl. Nat. Ver. Bremen, IV:290), 産地は書いていないが当時のHyogo, 現在の神戸産ではないかと思っている。1875年, Water-

house は Trans. ent. Soc. London, Part. I : 76-77 において Hab. Hiogo and Osaka "At the foot of Maiyasan it has occurred in great plenty" と大変貴重な記録を残している。そして、それ以後現在に至るまで兵庫県下では採集されたという記録は全く現れていない種である。絶滅したのではと危惧されていた種である。ところが、それから124年振りに姫路市姫山公園の犬糞に来ていた1♀が採集記録された (24.IX. 1992) (佐賀の昆虫No.31:53, 1997)。

姫路といえばこの種と斑紋がわりあいとよく似たミツコブエンマコガネが揖保川、夢前川沿いに多くいることでよく知られている地域と大変近いところで採集されており、その示された写真の斑紋からすれば、この発表種はヤマトエンマコガネにどうも間違いなさそうである (実物を見なければ確定的な判定は下せない)。

摩耶山麓に日本鹿が多かった頃、このエンマコガネも多くいたのではないかと思われるのであるが、野鹿の姿が消えたと同時にこのエンマコガネも姿を消したようであり、筆者はかねてから県中央部、すなわち野鹿のわりと棲息している地方 (朝来郡を中心に氷上, 多可, 神崎, 宍粟郡) にはヤマトエンマコガネがいるのではないかと考えていたが、調査に行くことができないまま漠然と滅亡したのではと考えていた。

かつて、筆者が本誌上に発表したように (きべりはむし, Vol.23, No.1:1-5, 1995), 奈良の春日山においても古くは多く産した地でも現在その個体数はかなり少なくなっているようであり、日本で本種が確実に産する地点というのはほとんど知られていないのが現状のようである。

今回は、犬糞から採集されたようであるが、姫路城のある姫山公園は環境としては良好の地であり、このあたりに棲息することはかなり確率が高いのではないだろうか。もっと近くの地点を調査するとともに県中央部を調べたらこの種の棲息が確かめられるかもしれないと思う。どなたかこの虫の調査をやって頂けないものかと願うものである (筆者には年齢的にこの調査の実施は無理のように考えている)。

この様な小型ではあるが斑紋もあり美しい糞虫が兵庫県下に産するのではということを確認して頂きたいものである。

(IV.1999)

* 兵庫県甲虫相資料・361

(TAKAHASHI TOSHIO 神戸市兵庫区氷室町1-44)